

的矛盾が描かれている。彼女達の周りには常にストリートチルドレンの姿がみられ、彼らは赤ちゃんを求める彼女達と接点を持ちながらも、日々の暮らしのために犯罪に手を染め、その生活の厳しさゆえに、シンナーに走る。また、彼女達をガイドする人の好い男性は不景気のために失業し、米国への出稼ぎを望み、その元手となる資金を稼ぐために宝くじに夢を託すが、その夢はかなわない。さらに、彼女達の1人をなんばする青年はメキシコの高所得階層の内気な娘を妊娠させるが、そのことすら知らずなんばを続け、妊娠した彼女は生まれた子供を修道院から養子に出すことになる。

映画はたった1時間半の中にこのようにたくさん的人物を登場させ、多様なエピソードをちりばめることによって、メキシコと米国の近くて遠い関係を描き出している。米国は今やメキシコ人を中心とするヒスパニック社会なしに動かなくなってきたおり、どこにいてもスペイン語での説明がなされるようになってきている。実際に、メキシコを訪れて現地の人にインタビューしても親戚の誰かが出稼ぎにいたり、ある意味ですごく近い関係になっている。

私が研究対象としている小売産業に限ってみても、メキシコの最大の小売業者はウォルマートであるし、米国のスーパーマーケットにはメキシコの食材が必需品として置かれている。このように、メキシコと米国との結びつきが密接になっているのもかわらず、互いの価値観が尊重されているかどうかということを考えれば疑問符が付く。

NAFTA（北米自由貿易協定）によって国内の格差が拡大したメキシコ社会において、恩恵を受けているのは一部の人々であり、映画の中で描かれた多くのエピソードも、こうした近くて遠い関係の不均衡な歩み寄りの一端を示しているように思われる。すでに述べたように、この作品をエンタテインメントとしてとらえると疑問符が付く。しかし、それぞれのエピソードは多様な問題を提起しており、十分に見る価値があるといえる。

## 石敢當と山羊汁

経営学部

矢田 博士

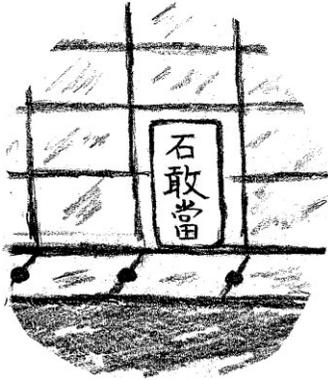
### 一、はじめに

この夏、沖縄に行ってきた。初めて沖縄の地に足を踏み入れて気づいたことは、沖縄には、日本本土、少なくともこの辺りでは、ほとんど目にする事のない独特の風俗・習慣が数多く見られるということだ。沖縄は観光地として有名なところなので、すでに行ったことがあり、ご存知の方もいるかと思われるが、一方では、まだ一度も行ったことのない人もいるであろうから、この機会に、私がそこで見たり聞いたり、あるいは後で調べたりしたことを紹介してみたいと思う。ただ、その全てを紹介するのは紙幅の関係から無理があるので、その中から最も深く印象に残った「石敢當」と「山羊汁」を対象を絞ることとする。

### 二、石敢當

沖縄の道を歩いていると、——と言っても、私が訪れたのは沖縄本島的那覇市の「国際通り」、初日に宿泊した宜野湾市、国頭郡にある「沖縄美ら海水族館」、知念村にある「齋場御嶽」、そしてその東の海上に浮かぶ「久高島」に限られるのであるが、——直進して丁字路の突き当たりにはさしかかったあたりで、必ずといってよいほど、「石敢當」という文字に出くわすのである。正確に言うと、「石敢當」と刻まれた石の碑が突き当たりの正面の塀の前に置かれていたり、あるいはその

ように刻まれた石の板が塀の壁にはめ込まれていたりするのだ。



これはいったい何かと言えば、一種の「魔除けのおまじない」なのだそうだ。魔物は角を曲がるのが苦手で、道を直進するものらしい。よって、丁字路の突き当たりに民家などがあれば、魔物はそのまま直進して塀の壁を突き破って侵入してしまうのだ。そこでそれを防ぐためにそのような場所に「石敢當」と刻んだ石の碑や石の板を設置するのだそうだ。

では「石敢當」とは、どのような意味なのか。「當」には、「防ぎ止める、さえぎる」等の意味がある。「敢」は動詞の前に用いられて、強い意志をもって行動することを表す。おそらく「石敢當」とは、直進して来る魔物に対して、「石が果敢いしに立ち向かおう」といった意味なのだろう。訓読すれば「石あ 敢あえて當たらん」とでもなるうか。

そもそも、この「石敢當」という言葉の由来は古く、史游しゆうという中国の前漢時代の人しゆうが編集した『急就篇きゅうしゅうへん』の巻一に、早くもそれが見える。『急就篇』は漢字を教えるための教科書の類で、その巻一は、例えば「衛益壽（衛氏は寿命を益す）」「任逢時（任氏は良い時に逢う）」「桓賢良（桓氏は賢良だ）」などのように、人の姓を表す一つの漢字に二つの漢字から成る言葉を加えた、合計三字から成る言葉を列挙して、漢字を覚えさせるといった形式をとっている。よって、「石敢當」もまた、もとは「石せき氏は果敢に立ち向かう」といった意味であったようだ。ちなみに、唐の顔師古の注には以下のように言う。

衛に石碁・石買・石悪有り。鄭に石癸・石楚・石制有り。皆な石氏と為す。周に石速有り。齊に石之紛ま如有り。其の後も亦た以まって族に命なづく。「敢あえて當あたる」とは、當たる所、敵無きを言うなり。

おそらく物質としての石が備え持つ硬い性質が、向かってくる魔物を防ぎ止めるのに適していることから、人の姓であった「石（せき）」から物質の「石（いし）」へと、いつしか置き換えられて解釈されるようになったのであろう。

### 三、山羊汁

沖縄美ら海水族館へ行く途中、国道沿いの沖縄料理店で食事をとることにした。今回の旅行で各地を案内してくれた沖縄生まれ沖縄育ちの平良さんという妻の友人が、しきりに山羊の肉を食べるよう勧めるので、勇気を出して食べてみた。ピパーツという胡椒に似た香辛料で香り付けをした汁に、山羊の肉を骨と内臓ごと入れて煮込み、それにヨモギを薬味として加えたもので、中にぶよぶよとしたものが混じっていることがあるが、それは山羊の血が固まったものだそうだ。なかなかの美味ではあるが、なんといっても臭いがきつい。歯の間に挟まったものを取らずにいると、その日は一日、山羊の香かりを楽しめる。

沖縄では山羊のことをヒージャーと呼ぶ。山羊汁は正式には「ヒージャグスイ（山羊薬膳料理）」と言い、沖縄の代表的な精力料理なのだそうだ。町中まちなかのスーパーや市場などでも当たり前のように山羊のもも肉が売られている。以前は食肉用として山羊を飼っていた家も多かったそうだ。実際、妻の友人も子供のころ山羊を飼っていたとのことで、ただペットのように名前を付けてしまうと、情が移り食べにくくなるので、単に「ヤギ」と呼んでいたそうだ。



山羊汁

ついでながら、その沖縄料理店の壁に、他の料理のメニューと並んで「ヒト肉あります」と書いた紙が貼ってあった。えっ、そんなものまで食べるのか、と思って、恐る恐る注文してみたところ、イルカの肉を唐揚げにしたものであった。沖縄ではイルカのことを「ヒートウー」と呼ぶのだそう。味はクジラの肉に似ている。そもそもイルカはクジラの一類で、クジラの中で小形のハクジラ類をイルカと総称しているのだから、味が似ていて当然であろう。

それはともかく、沖縄に行かれることがあったら、ぜひ山羊汁に挑戦されることをお勧めする。



ヒト肉

#### 四、おわりに

わずか三泊四日という滞在期間であったが、妻の友人の案内のおかげで、密度の濃い体験が出来た。石敢當と山羊汁のほかにも、首里城近くの瑞泉という泡盛工場を見学したこと、沖縄美ら海水族館でジンベイザメの餌付けを見たこと、斎場御

嶽<sup>たき</sup>という世界遺産にも指定されている霊地にお参りしたこと、琉球民族の祖先で「アマミキヨ、シネリキヨ」という男女の神が最初に降臨したとされ、「神の島」と崇拝されている久高島<sup>くだかしま</sup>に渡ったこと、普天間飛行場代替施設の建設予定地とされている辺野古<sup>へんのこ</sup>の海で、座り込みの抗議行動をしている人たちの姿を見て、沖縄の厳しい現実を思い知らされたこと、国際通りに通じる市場通りの公設市場で、ウミブドウ<sup>みみぐー</sup>や耳皮<sup>みみかわ</sup>（豚の耳の皮）を試食し、面皮<sup>めんかわ</sup>（豚の顔面の皮）やイラブー（うみへび）といった珍しい食材を見て回ったこと、——等々、紹介したいことはたくさんあるのだが、この辺で筆を擱くこととする。

#### 《参考文献》

- 『増訂 沖縄の習俗と信仰』窪徳忠著、東京大学出版会、1974年
- 『沖縄生活誌』高良勉著、岩波新書、2005年
- 『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』比嘉康雄著、集英社新書、2005年
- 『沖縄いろいろ事典』ナイチャーズ編、新潮社とんぼの本、2004年